

自己中心主義的現前主義とは何か

What is egocentric presentism?

俵 邦昭

Kuniaki TAWARA

アブストラクト

本稿の目的は、C. J. ヘアが、著書 *On Myself, and Other, Less Important Subjects* で展開した「自己中心的現前主義」という立場の紹介、及びその検討である。ヘアは我々がもつ選好についての自己バイアスを説明するため、私の知覚対象・感覚経験のみが「現前する」という単項的性質をもつ、というある種の独我論的立場を主張する。第一節では、自己バイアスに関する問題を提示をする。第二節では、自己中心的現前主義の説明をする。第三節では、自己中心的現前主義が自己バイアスに関わる問題を解決することを示す。

Abstract

The purpose of this paper is to consider a position called the "egocentric presentism" that C. J. Hare develops in his book *On Myself, and Other, Less Important Subjects*. This is a sort of solipsistic position according to which only my perceptual / sensory experience has a monadic property of "being present." Hare defends this position on the ground that it enables us to see why the self-bias in our preference is not irrational. In Section 1, I present the problem concerning the self-bias. In Section 2, I explain the egocentric presentism. In Section 3, I show that egocentric presentism solves the problem of the self-bias.

1 問題

1.1 調和テーゼ

快樂主義的功利主義を前提とすれば、選好に関して、以下のような原理が成り立つと思われる。

(1)我々は、よりよい世界¹を選好すべきである

ここでは、「よりよい」で「快樂の総量がより多い」を意味することとする。この原理において、ひとがいかなる世界を選好するかは、世界内の快苦の質と量のみによって決定される。(1)は非人称的な原理であり、私と他人の苦痛を区別しない。

一方、ひとは快苦の質と量のみならず、その快苦が誰に生じるかも気にかける。つまり、自己の快苦に対して、より重みを与える。たとえどんな平等主義者であっても、以下のような意味において、我々はみな、自身に偏った選好をもつと思われる。

(2)他のことすべてが等しいならば、我々は苦痛が自身よりも他者に生じることを選好

¹ ヘアは「極大事態(maximal state of affairs)」という言葉を使っているが、本稿では「世界」で統一する。

する

ここで表現されているバイアスは、自身の快苦のみを気にかけるような、極端な自己中心的快樂主義のものではない。他人の快苦も考慮にいたした上で総合的な選好をする、穏健な自己中心的快樂主義のものである。以下のようなケースを考えよう。人物Aと人物Bのうち、いずれかが拷問を受けることを避けられないとする。加えて、どちらが拷問を受けたとしても、苦痛に関して質と量、いかなる面においても異ならないとしよう。もしあなたがAであれば、Bが拷問を受ける世界を選好するだろう。このように、他のことすべてが等しいならば、苦痛が自身よりも他者に生じる世界を選好するひとを、穏健な自己中心的快樂主義者と呼ぶ。

穏健な自己中心的快樂主義者の選好は、不合理なものではない。アルコール依存症患者が、悪いことであると知りながら酒を飲むことを止められないのは、不合理な選好の代表例であろう。一方、(2)に従った選好は、理想的に合理的な行為者であっても認められるものであるように思える。

非人称的な(1)と、穏健な人称バイアスを表す(2)の間にはギャップが存在する。非人称的に見るならば、AまたはBが拷問を受ける二つの世界について、どちらかを選好する合理的な理由はない。一方、人称的に見るのであれば、つまりそこに「私であること」という事実を読み込むのであれば、この二つの選択肢は同等ではない。このギャップを説明することは可能だろうか。もしそうであるならば、(1)と(2)の間には、いかなる関係が成り立つだろうか。ヘアは以下のようなテーゼを擁護する。

調和 (Harmony) テーゼ：穏健な自己中心的快樂主義者が、自身の苦しみが少ない状況を選好するときはいつでもあれ、そのことによって単によりよい世界を選好する²

「単に…選好する」とは、「何かにとって」よい選好をするのではない、ということの意味する。拷問ケースでは、AはAにとってよい世界を選好し、BはBにとってよい世界を選好する。調和テーゼによれば、Aが、Bが拷問を受ける世界を選好するとき、そのことによって、単に「快の総量のより多い世界」として、その世界を選好している。

一見したところ、調和テーゼを擁護することは不可能であるように思われる。というのもAにとってよい世界は、Bにとってよい世界と比べて、快の総量がより多い世界ではないからである。いかにして、調和テーゼを擁護することができるだろうか。

1.2 調和テーゼに対する三つの問題

ヘアは調和テーゼに対して、三つの問題を挙げている。第一の問題は、根拠問題と呼ばれるものである。もし調和テーゼが正しいならば、他人の快苦ではなく、私自身の快苦が世界全体の価値に重要な寄与をなすことについて、正当化してくれる根拠が必要となる。しかし、なにが私の体験を、他人とは異なる、特別なものとするのだろうか。

第二の問題は、一般化問題である。調和テーゼが正しいならば、私自身だけではなく、いかなる穏健な自己中心的快樂主義者も、自身の快を選好することによってよりよい世界を選好する、ということを示さねばならない。拷問ケースにおいて、私は私にとってより

² Hare (2009), p. 2.

よい世界を愛好するし、あなたはあなたにとってよりよい世界を愛好する。もし私の愛好する世界が、より快の総量の多い世界であるならば、あなたはより快の総量の少ない世界を愛好していることとなる。私とあなたがどちらも、自己中心的な愛好において、よりよい世界を愛好することは不可能に思える。

第三の問題は、還元不可能な自己中心主義的愛好の問題である。私が特定の人物（俵邦昭）を気にかけることと、私が私自身を気にかけることはいつも同じではない。以下の事例を考えよう。人物 A と人物 B のいずれか一方が拷問を受けることになっている。どちらが拷問を受けたとしても、苦痛に関していかなる面においても異ならない。私は自分が A と B のどちらかであることは知っているのだが、記憶喪失により、そのどちらであるかを覚えていない。このとき、「A が拷問を受ける」という情報を与えられたとしても、私は幸福でも不幸でもない。A が私である場合と、B が私である場合の、二つの認識論的可能性が開かれたままであるからである。このとき私は、B が私であることを望む。しかしこれは、調和テーゼの反例となる。というのも、A が私であることと、B が私であることに対応する、異なった世界は存在しないからだ。存在するのは、A が拷問を受ける世界、ひとつのみである。

次節では、調和テーゼを擁護するため、これら三つの問題を説明するような、世界と自己に関する形而上学的世界モデルを提示する。

2 自己中心的現前主義

調和テーゼを擁護するため、へアは「現前する」という特殊な性質を導入する。へアによると、私（へアの著書においてはへアを指すが、各自、自身のことを指すとして読んでいただきたい）の知覚対象や感覚経験のみが「現前する」という性質をもっている。そのため、私の痛みはその分、他人の同等の痛みよりも重み付けられる。よって、現前以外の他のすべての条件が等しければ、自己中心的な愛好は、よりよい世界の愛好と一致する。

へアは、「現前する」という性質を、時間論における「現在である」という性質と類比的に導入する。ひとは、自分の人生全体の快の総量がより大きくなるような愛好をする。一方、ひとは快苦そのものだけでなく、快苦がいつ生じるか、ということも気にかける。苦痛の質と量に関してまったく異ならないならば、我々はその苦痛が未来ではなく過去であることを愛好する。あなたが拷問を受けることになっているとしよう。あなたはある時、眠りから目を覚ます。意識が混濁しており、拷問をこれから受けるのか、拷問がもう終わったのか、覚えていない。このとき私は、拷問が未来の出来事ではなく、過去の出来事であることを愛好するだろう。この愛好は合理的に思える。しかし、未来の拷問と過去の拷問が、苦痛の質と量において異ならないであれば、なぜこのような愛好をもつのであろうか。過去の苦痛と未来の苦痛が、形而上学的に同じ身分をもつのであれば、このような時間バイアスを説明することは困難となる。³

へアは、この時間バイアスを説明するため、時間の形而上学における A 理論に訴える。A 理論によれば、特定の時点が「現在である」という特権的な性質をもつ。一方、B 理論

³ 過去と未来の苦痛の量が異なるケースを考えれば、対比はより明確になる。過去における十時間の拷問と、未来における一時間の拷問を比較したとしても、我々は過去における十時間の拷問を愛好するだろう。無時間的に見るならば、私はより悪い世界を愛好していることになる。しかし、この愛好の偏りは我々にとって自然であり、不合理ではないように思われる。

によれば、「現在である」のような特権的な時点は存在しない。すべての時点は、形而上学的に等しい。B理論に従えば、「現在である」とは、単に発話時点を指す指標的な表現である。

A理論の認める、単項的な「現在である」という性質を認めるならば、時間に関する選好のバイアスを説明することができる。たとえば、A理論のひとつである、移動スポットライト説⁴を考えよう。移動スポットライト説によれば、すべての歴史を含んだ四次元ブロック宇宙の、ある特定の時点が、スポットライトのように、「現在である」という単項的性質を例化している。そしてその「現在である」という性質が四次元ブロック宇宙上を移動する。現在の痛みは、やがて「現在である」という性質を失い、過去の痛みとなる。過去の痛みは、もはや「現在である」という性質を例化することはない。一方、未来の痛みはいずれ「現在である」という性質を例化する。この事実によって、現在と未来の痛みをより重みづけるといふ、我々の時間バイアスは説明される。

ヘアはA理論の「現在である」という性質と類比的に、知覚・感覚対象に対する「現前する」という性質を導入する。デカルト的懐疑から始めよう。現在もっているすべての信念を捨て、疑いえない所与から世界を構築する。二つの確実なことがある。ひとつは、私には、世界に存在しているもののうちいくつかのもの、目の前にあるパソコンのディスプレイ、筆記用具、私の腕の痛みなど、ただそれらだけが現前しているということ。もうひとつは、それらものを知覚対象としてもつ「私」が存在しているということである。しかし、ここで確実なものとして「現前している」という性質とは何か。

一般的に「現前する」とは、主体と対象の二項関係だと思われている。もし私が、東京タワーの前に立っているならば、私に対して東京タワーのある側面が視覚的に現前しているだろう。また、エッフェル塔の前に立っている他の誰かに対しては、エッフェル塔のある側面が視覚的に現前している。「現前している」という性質は、形や色のような対象がそれだけでもつ単項的性質ではなく、主体と対象の関係であると思われる。

一方、ヘアにとっては、「現前している」は色や形と同じように、対象がそれだけでもつ、単項的な性質である。つまり、「東京タワー（のある部分）が赤い」という命題と同じく「東京タワー（のある部分）が現前する」ということができる。

世界内のいくつかの対象が、このような「現前している」という単項的性質をもつ。私の腕の痛みは現前をもち、他人の足の痛みは現前をもたない。そして、「現前する」という性質をもつすべての対象、それのみを知覚・感覚対象として持つひとが一人だけ存在する。そのようなひとを「私」と呼ぶ。自己中心的現前主義とは、ただ一つの主観的世界、つまり「私」の体験が現前する世界のみが存在する、という主張である。

もし自己中心的現前主義が正しいならば、穏健な自己中心的選好は、世界全体のよさの選好と一致する。拷問ケースを考えよう。Aが拷問を受ける世界と、Bが拷問を受ける世界の苦痛の質と量は同じである。しかし、Aが私であるとすれば、Aの知覚対象と感覚のみが「現前する」という性質をもつ。この点において、Aが拷問を受ける世界のほうがより悪い。よって、もし私がAであるならば、Bが拷問を受ける世界を選好することは、よりよい世界を選好することと等しい。

次の節では、自己中心的現前主義に従い、調和テーゼについての三つ問題を解決する。

⁴ 「移動スポットライト説」の詳しい説明に関しては Cameron(2015)を参照。

3 問題の解決

第一に、根拠問題に答える。自己中心主義的現前主義にとって、私と他人の痛みは対称的ではない。というのも、私の痛みは現前し、他人の痛みは現前しないからである。しかしこの事実は、我々に、現前する苦痛だけが重要である、という極端な自己中心的快樂主義にコミットさせるものではない。「現前する」という性質は、快をよりよいもの、苦痛をより悪いものにする一つの要素に過ぎない。強さ、長さ、数など、苦痛の重み付けについての多くの要素がある。よって、自己中心的現前主義者は、私の指のささくれによる不快感と、他人の足の骨折による苦痛を比べたとき、私の不快感の現前を考慮にいれたとしても、私の指のささくれのほうがましである、という判断を可能にする。

第二に、一般化問題に答える。拷問ケースにおいて、私がAであるならば、私はBが拷問を受ける世界を選好し、BはAが拷問を受ける世界を選好する。現前する体験をもつのはAであるため、このときBは、苦痛の現前を選好していることになる。Bには、自己中心的考慮と世界全体のよさについての考慮のあいだに調和はない。その調和をもつのは、私であるAのみである。⁵

第三に、還元不可能な自己中心的選好の問題に答える。もし自己中心的現前主義が正しいならば、Aが私である場合と、Bが私である場合は、実際に異なる世界を表現している。Aが私である世界は、Aの体験のみが現前性をもつ世界であり、Bが私である世界は、Bの体験のみが現前性をもつ世界である。よって、このケースにおいて私は、Bの体験が現前する、より苦痛の少ない世界を選好している。

結語

我々は、たとえどんな平等主義者であっても、世界の選好に関して、最低限の人称バイアスをもつ。そして、この人称バイアスは我々にとって、不合理なものではない。一方、世界を非人称的に眺めるならば、快苦の質と量が同等な世界の選好に関して、どれかひとつを選び出すような、合理的な理由は存在しない。つまり、非人称的世界観によっては、我々のもつ人称バイアスを説明することはできない。ヘアによれば、「現前する」という単項的性質を認める自己中心的現前主義は、人称バイアスに形而上学的な根拠を与える。

人称バイアスを説明するために、これほど大掛かりな形而上学的仕掛けが必要であるかどうかは、明らかではない。しかし、人称バイアスを説明してくれる、よりよい理論は、いまのところはないように思える。もちろん、穏健な人称バイアスが真に合理的である、という点に異論があるひともあるだろう。そのようなひとには、人称バイアスを根拠付ける事実は必要ない。一方、穏健な人称バイアスが自然なものだと考えるだろう多くの人にとっては、自己中心的現前主義はよい選択肢となりうる。

⁵ Bの判断が、(1)の原理によって支持されているかを評価するよりよい方法として、ヘアはBの選好する世界を、Bの視点から(Aが拷問を受け、その苦痛が現前していない)と解釈することを挙げている。

文献

- Cameron, R., (2015), *The Moving Spotlight: An Essay on Time and Ontology*, Oxford University Press.
- Hare, C., (2009), *On Myself, and Other, Less Important Subjects*, Princeton University Press.
- Hare, C., (2010), "Realism About Tense and Perspective." *Philosophical Compass* 5: 760-769.
- Sider, T., (2001), *Four-Dimensionalism: An Ontology of Persistence and Time*, Oxford University Press. (『四次元主義の哲学：持続と時間の存在論』、中山康雄監訳、小山虎、齋藤暢人、鈴木生郎訳、春秋社、2007年。)

(たわら　くにあき／千葉大学大学院人文社会科学研究所 博士後期課程)